リチャード・エマート教授の紹介

徳丸 吉彦

リチャード・エマート教授は、1949 年にアメリカのオハイオ州ブラフトンに生まれた音楽学者であり、能楽の演奏家・作曲家です。インディアナ州リッチモンドにあるアーラム大学で日本語や歴史学を学び、1973 年に来日して、東京藝術大学大学院修士課程と博士課程で、故・小泉文夫教授(1927-83)と故・横道萬里雄教授（1916－2012）のもとで、日本とアジアの伝統芸能を中心に音楽学を学ばれました。エマート氏は、同時に、尺八と能楽の演奏を学びました。能楽に関しては、謡・仕舞そして、小鼓・大鼓・太鼓・能管を優れた演奏家たちに師事して、喜多流仕舞教士の資格も得られました。現在は武蔵野大学教授として教育に従事し、世界の多くの地域で能の訓練を行い、また、能の作曲と演出で活動しています。

私がエマート氏に初めて会ったのは 1975 年のことでしたが、エマート氏はすでに日本語が堪能で、仲間からはリックさんと呼ばれ、日本語でダジャレを連発する能力をもっていました。

1970 年代は、日本が世界に向けて日本とアジアの音楽を積極的に発信することを始める時期でした。日本の国際交流基金は他のアジア諸国との音楽的な交流を盛んにするとともに、その成果を録音や映像で世界に発信しました。1974 年に、私は、小泉文夫、大阪大学の山口修とともに国際交流基金から新しいプロジェクトの推進を委嘱されました。それが、『アジア伝統芸能の交流』（英語名 Asian Traditional Performing Arts、略称 ATPA）と呼ばれる 15 年に及ぶ長期プロジェクトです。

その第一回の会合が東京で開かれたのが 1976 年です。演奏者と研究者によるセミナー、公開の演奏会、そして、録音・録画が行われました。そのすべての過程で、日本語と英語を話す研究者として重要な役割を果たしたのがエマート氏でした。その報告書が翌 1977 年に *Asian Musics in an Asian Perspective* (Tokyo: Heibonsha)として出版されました。これは英語による出版でしたので、リックさんは、編集にあたった小泉・徳丸・山口を協力編集者の一人として支えてくれました。第二回以降の ATPA とその報告書の編集で、彼はさらに大きな役割を果たしました。

ATPA に対しては、主としてアメリカの民族音楽学の研究者から、「日本がアジアの音楽を搾取して、変質させている」という批判が寄せられました。これは、まったくの誤解です。例えば、タイの伝統音楽家たちが、ATPA で多様な音楽を聴いて、自分たちも「新しいこと」を行いたいと考え、普段は行わない編成を試しました。それを私たち日本の監修者が録音・録画して公開したのです。それが、「伝統は過去のもの」と考える研究者から批判を受けたのです。しかし、ATPA の目的は、アジアの音楽を固定して記録することではなく、それぞれの伝統の担い手が起こす変化を認めて、伝統を「生きている」ものとして

存続させることにありました。

言い換えれば、ATPA には、「伝統には未来がある」という信念がありました。これは、日本の能楽にも当てはまることです。能楽が明治維新後も、また、第二次大戦後も、生きた伝統として存続したのは、新しい作品が生まれ、古典に対する新しい解釈が生まれてきたからです。

能楽という伝統の未来を積極的に開拓したのがエマート氏です。彼は、能楽を日本語ではなく、英語で上演することで、能という伝統を強化することを積極的に進めました。これは、能楽のいくつかの要素を西洋音楽と組み合わせるものではなく、能楽を英語で上演するものです。そのため、エマート氏は英語能劇団の「シアター能楽」（Theatre Nohgaku）を創立し、さらに、安定した上演を継続するために、日本・アメリカ・イギリス他で、能楽を上演できる人材の養成を行いました。アメリカ、ペンシルヴァニア州のブルームズバーグ、イギリスのロンドン大学ローヤル・ホラウェーで行う能の訓練プロジェクトを、エマート氏は責任者として現在も続けています。

エマート氏は、日本と外国の演奏者・脚本家の協力を得て、多くの英語能の作曲と演出を行ってきました。一覧表に記すのは、その代表例です。言葉は英語ですが、他の部分、例えば、面の使用や、地謡や囃子は能楽の伝統に立脚したものです。この試みは、能楽の技法をよく知るエマート氏にして初めて可能になったものです。

また、エマート氏は、多くの国で日本語・英語で能を演奏することによって、能の力と魅力を世界に知らせました。また、他のアジアの上演芸術との国際的なコラボレーション、例えば、*Dragon Bond Rite*（龍結式）や *Siddharta*（シッダールタ）に参加することによって、他のアジアの演奏家たちに能の重要性を知らせました。エマート氏が国立能楽堂のために書いた英文解説（一覧表は、この文章の英語訳にあります）も、多くの人が能を深く理解することを助けています。

2019 年にエマート氏が古稀を迎えたのを記念して、ロンドンで本が出版されました。Cheong, Jannette (ed.) *Getting to noh, a tribute to Richard Emmert - a man with a constant vision* (London; LDP, London Digital Print, 2020)です。書名の *Getting to noh* を正確に訳す自信はありませんが、『能を能（よ）く知るに至る』としておきます。この書に寄稿された文章から、エマート氏が一緒に仕事をした人々から、愛され、尊敬されていることがよく分かります。

結論として私が指摘したいのは、エマート氏の英語能が、能楽が文化と言語を越えて新しい作品を生成する力をもつことを示したことです。私は、エマート氏の英語能が、世界の上演芸術に新しい刺激を与えることを期待しています。

（聖徳大学名誉教授、お茶の水女子大学名誉教授）

エマート氏の英語能主要作品

《鷹の井》（1981）

《漂炎》*Drifting fires*（1985）

《セイント・フランシス》　*Saint Francis*（1988）

《イライザ》*Eliza*（1989））

《ラコタの月》　*Moon of the Scarlet Plums*（2001）

《不毛の松》*Pine barrens*（2006）

《カモメ》　*The Gull*（2006）

英語版《墨田川》　*Sumida River*（2008）

《パゴダ》　*Pagoda*（2009）

《メンフィスの青い月》　*Blue Moon Over Memphis*（2013）

《オッペンハイマー》　*Oppenheimer*（2015）

《エミリー》　*Emily*（2018）

エマート氏の CD

『Noh in English　英語能　世界を駈けるユウゲニズム』、テイチクレコード、TECY-28010、1990.

KOIZUMI Fumio Memorial Archives, All rights reserved.